

蕉風連句の先蹤

——「へぼち草」歌仙

齋藤 孝

一

芭蕉は、俳諧の作風を幾度も変えた。そして芭蕉独自のもの——蕉風——を作り上げ、又その蕉風の中でも変わって行った。

従来、その蕉風への変化について、発句の上での変化については、多くの追究がなされて来たが、連句上での具体的な分析は、あまりなされていない。全連句を対象にした解釈・鑑賞などが、発句に対するものに比べ、少ないし、遅れていることの反映でもあるのだろう。

今、あらためて、具体的に、連句の上での、芭蕉初期の作風から蕉風のものへの変化を考えて見たい。

二

従来、連句での蕉風の成立について、以下の様な指摘がある。

1 堀切 実

「蕉風俳諧のほんとうの意味での確立は、貞享元年（一六八四）の『冬の日』五歌仙の成立にあったといえる。」

堀切 実 「蕉風連句の特質」『松尾芭蕉集』②

2 島居 清

「芭蕉の連句をその俳風から時代別にその変遷のあとをたどるとおおむね四期に分けるのが適当と思われる。すなわち……

② 『冬の日』から始まる蕉風新興時代……

著しい漢詩文調や字余りがほとんど急速に姿を消し始める。それはまことに突然のごとく、貞享元年の『冬の日』に至って、漢詩文調に取って代って、むしろ緊迫のある構成的な句が盛んにつくられるようになる。」

島居 清 「芭蕉連句の歩み」『芭蕉連句叢書』

注目は「漢詩文調」「字余り」の減少、「構成的な句の登場」である。「一転」「突然のごとく」の変化である。

3 以上の『冬の日』を蕉風の開始の時期とする見方に対し、乾 裕幸は、それを疑問視し、勝峯 晋風は、『武蔵曲』の百韻を蕉風の開基と評する。

4 東 明雅は、歌仙「花にうき世」（東は天和二年と言うが、三年説が多い）を、具体的に分析し、このあたりから蕉風への動きがあると主張する。

「この『花にうき世』歌仙における歌仙形態の採用と漢詩・漢文調による余情付け、また三句の転じの意識の発生、これがこの作品をもって、芭蕉独自の俳諧の新しい出発点とする理由である」

東 明雅 「芭蕉の連句」『国文学 解釈と鑑賞』

以下、その「花にうき世」も含め、談林から蕉風への動きの見えそうな、近接する五歌仙（七歌仙の内二つは略）

① 「詩商人」天和二年

〔鮑くや今年〕天和二年……芭蕉は一句のみ

略）

② 「花にうき世」天和三年

③ 「へぼち草」天和三年

④ 「夏馬の遅行」天和三年

〔師の桜〕貞享元年 略）

⑤ 「狂句木枯の」貞享元年

を、分析して考えて見たい。

（③と④の成立時期・前後関係について、④③の順との異論もあるが、全連句に注釈を付けた阿部正美『芭蕉連句抄 三篇』の並べ順に従う）

①②は『みなしぐり』

③④は芭蕉の甲斐流寓中の三吟二巻

⑤は『冬の日』の歌仙である。

ア 方法

連句相互間の差異等を、分析する指標・着眼点について、客観的な基準は確立していない。今は次のものを指標として使用したい。

A 句（発句を含めて）の表記上にあらわれている特徴点

☆ 漢詩文的表記表現がなされている

☆ 字余りや破調

BC 句を作る時何をたよりとして作ったか。句の構想の仕方・趣向の定め方

B ☆物付け・言葉付け

C

C1 ☆中国関係のもの——漢詩文・中国の詩人・古典故事などを使用している

C2 ☆日本のもの——日本の古典・故事・謡曲などを使った句作り

D ☆打越に対して輪廻の関係になっている句

E ☆擬人化の手法がとられている

☆怪異怪奇現象が表現されている

☆和歌などにはないマイナスイメージのもの（例えば——血、首なき など）が句中にある

F ☆風狂性の表現

☆素材の非日常性（句に描かれているものが、平常の状態の生活の表現とは思えないもの。この非日常性という項目は、前項Eと重なり合うことが多い。Eとまでは分類できないが、次のGの様に穏やかな句とは言い難いものを、Gとわかるために設定する指標）

G ☆余情付け・心付けと思われるもの

(A～Fには分類できないという消極的な理由のものも含む。しかし、表現・素材もともに穏やかなものである)

*その他 景気という指標も考えてみたが、各句でうまく使用できなかった。

イ 具体的分析

これらの指標を使い、各句を特徴付けると以下の様になる。

注1 発句も対象とする。

注2 各句の指標の指摘は、各句一つづつとは限らない。

注3 略号は以下のとおり

表——漢詩文的表現 (A) 字——字余りや破調 (A) 詞——物付け・言葉付け (B)

中——中国関係のものにもとづいて (C1) 日——日本のものにもとづいて (C2) 輪——輪廻関係 (D)

擬——擬人化 (E) 怪——怪異怪奇 (E) マー——マイナスイメージ (E) 風——風狂性 (F)

非——非日常性 (F) 余——余情付け・心付け (G)

注4 各句の解釈等については、島居 清『芭蕉連句全注解 第三冊』によるところが多い。

注5 『新編 芭蕉大成』による。「」内は底本の形。

① 「詩商人」歌仙 記述略

② 「花にうき世」歌仙 記述略

③ 「へばち草」歌仙

- | | | | |
|----|----------------------|----|-------|
| 一 | 胡〔故〕 艸垣穂に胡〔木〕 瓜もむ屋かな | 麩疳 | (余) |
| 二 | 笠おもしろや卯の実村雨 | 一品 | 余 |
| 三 | 散る蜜香に桜を払ふらん | 芭蕉 | 中 |
| 四 | 市に小言をになふ朝月 | 疳 | 余 |
| 五 | や、寒の殿は小袖を打ち掛けて | 晶 | 余 |
| 六 | 紅白の菊風に碁を採 | 蕉 | 余 |
| 七 | 静かなる卵塔雨の日を暗く | 疳 | マ |
| 八 | 舎人は縁をかりて居眠る | 晶 | 余 |
| 九 | 楊弓の逸れ矢ハ御簾にとゞまりて | 蕉 | 詞 |
| 十 | 「浮気〔上気〕」の神と齋ふ三線 | 疳 | 余 |
| 十一 | 鳥羽玉の裸を箔に彩けり | 晶 | 余 |
| 十二 | 密夫恥ぢよ命つれなき | 蕉 | 輪 |
| 十三 | 朝顔のくねるに揺り起されて | 疳 | 擬 |
| 十四 | 憂しと髪切る葛の偽り | 晶 | 詞・擬・マ |
| 十五 | 母の親に甘えて月を背けをり | 蕉 | 字 |
| 十六 | 埋もれて果てぬ身を支離にて | 疳 | マ |
| 十七 | 通夜堂のかい暮れ花を覗くころ | 晶 | 余 |
| 十八 | 桜子消て釣り鐘に垂 | 蕉 | 詞・日・マ |

- ④ 「夏馬の運行」歌仙 記述略
- ⑤ 「狂句木枯の」歌仙 記述略

以上の結果を表にする

G	F	E	D	C I	C	B	A	
6	7	4	2	10	14	12	12	①
6	7	7	1	7	9	11	8	②
16	5	9	2	4	5	7	2	③
13	7	9	1	3	5	3	8	④
22	5	4	1	2	3	3	1	⑤

ウー1 結果の分析 1……各指標の数字の時間的变化に見る特徴

作品の成立の時期の順を①↓②↓③↓④↓⑤と考えて、話をすすめる。

1 A (表記・表現上の異形) は、時間とともに姿をひそめる。(④が少し気になるが、④の歌仙の成立事情の反映かも知れない。この事は後に取り上げる) ①と⑤とに注目して見ると、12句↓1句へと見事な変化である。

- 2 B (物付け・詞付け) も後になるほど少なくなっていく。①と⑤を比較すると12→3である。
- 3 Cの中国・日本の古典などに頼る付け方も時間とともに減少している。
- 4 D輪廻は全期を通じ数も少なく、時による変化なし。
- 5 Eについてもあまり明確にはいえない。そして⑤でも、マイナスイメージの言葉が何度も出てくる。この、『冬の日』に至る時期、まだこの点では、以前からの手法の影を引いていたのだろう。
- 6 Gは大体時間とともに増えている。心付け・余情付けの手法の増加である。⑤の歌仙内部で見ると、36句の内22句と他を圧倒している。

以上全体として言える事は、物付け・言葉付けや古典による句作り・付けの手法から、心付け・余情付けへの変化である。この大きい動きは、旧来の指摘のとおりである。

ウー2 結果の分析 2……各歌仙の特徴

表の数字にもとづき、各歌仙の特徴を相互に比較する。

1 ①「詩商人」(「みなしぐり」)の特徴

(1) Aの漢詩文的句調、字余り・破調など表記上の異形

(2) Bの詞付け

(3) Cの内、中国関係によるもの

の3つの指標の数が、他の歌仙に比べて、抜きん出ている。ここに、天和期の俳諧の、漢詩文調や非定型の作品の多いことの特徴がよく表れている。

2 ②「花にうき世」「みなしぐり」の特徴

(1) 各数字のあり方が、①と③の間中であるが

(2) ③④のグループ（甲斐流寓中のもの）と比較すると

(2) —1 B（詞付け）の数の多さ

(2) —2 C—1の中国関係での句作りの多さ

そして逆に

(2) —3 特にGの余情付けの少なさ

以上の三点で、一線が引ける。これらの点から考えて②「花にうき世」歌仙は、③④グループとは異質のものだと言える。Gの指標で見ると、②6句から⑤22句へと、②は⑤「狂句木枯の」とは全く別のものである。この歌仙は、(1)で指摘したように①と③の間中のようにみえるが、同じ「みなしぐり」の①に近親性があるようだ。

以上の様に、この「花にうき世」歌仙が、蕉風に直接つながっているとは、言えない。東 明雅の、この歌仙が、「芭蕉独自の俳諧の新しい出発点」という主張は認め難い。

3 ③「へばち草」④「夏馬の運行」

①から⑤への流れの中で、③と④は大体同じ特徴を持っていると指摘できる。①②群とも⑤とも、区別できる指標の数字を持っている。

4 ④「夏馬の運行」の特徴

③と大体同じと言いながらも④は

ア Aの項目の数字が多く、流れに逆行していること

イ この歌仙中、意味不明の句が三句あること（——多分一度巻いた後での、推敲が充分行われていない事の反映）

ウ 各句の作者名が、一巡後未記載

エ 歌仙全体から受ける印象が不鮮明

などの問題点を持つている。これらの事から、この「夏馬の遅行」は、旧来の天和調の作風から抜け出る新しい方法を模索しながらも、満足出来る作品に至らなかつたため、一応三人で付け合つただけで、以後、手を入れることを止めてしまった、試作品だつたと思われる。巻いたのが、④↓③の順だつた可能性も考えられなくはない。

前項3の所で、③と④一括にして来たが、今挙げた事柄から、③と④とは同等ではない。その事を頭に置き、分析表のGに、再度注目してみる。一歌仙の内部の他の指標と比較して、この手法が、他の手法より、数が多く、主流に成り出すのが、③の歌仙からである。③は、①②と一線を画し、⑤と同じグループを形成している。③「へぼち草」が、蕉風への転換点である。

5 ⑤「狂句木枯の」の特徴

その③の歌仙と比較する。B 詞付け7↓3、G 16↓22と格段と余情付けの方向へ進んでいる。

歌仙全体から受ける感じも含めて、やはり「狂句木枯の」(『冬の日』)は、一つの時代の始まりである。

エ 分析の結論

芭蕉の、甲斐流寓中の、麁癖・一品・芭蕉による三吟歌仙「へぼち草」(天和三年)が、『冬の日』(⑤「狂句木枯しの」貞享元年)に、一年以上先立つての、蕉風連句の先蹤作と言つて良いと思われる。実際、この歌仙には、たしかに旧来の手法も多く見られるが

三 散る蛩香に桜を払ふらん

四 市に小言をになふ朝月

五 や、寒の殿は小袖を打ち掛けて

などの付け方は、新しい方向を積極的に追求していると判断できる。

新しい作風へ、いつ、どの作品から、という事を考えた場合、発句上では、句そのものが短く、その短い句からは中々、その方法の意図を見ることは出来にくいのが、連句の場合、歌仙なら三十六句全体を通してながめる中から、それなりにその意図・手法の特徴が見えてくる。連句で考えた場合、天和三年という年が、蕉風と言われる方法の意図的な努力が始まった時点と考えられる。

四

この新しい作風への変化がなぜ生じたのかという点をめぐって

(1) 俳諧は、天和・貞享期の行き詰まりの中で、全く新しい展開を求められていた。

(2) 「旅」を契機として。

芭蕉は生涯を通じ、大きい「旅」のなかで新しい作風を作り上げていく。天和二年末の江戸大火・芭蕉庵消失により、天和三年に、甲斐に流寓する。この期間を、「野ざらし紀行」の旅に先立つ、半年間ほどの「旅」と考える事が出来る。

この「旅」の影響。

(3) この新しい傾向は、三吟の他の連衆、麁峙・一品が先導したのではないという事。

(4) 手法Gは一見何らの原則もなく勝手気ままに付けられている様に見えるが、③「へばち草」⑤「狂句木枯の」では、「とび」「ぬけ」の手法が多用されていること。

これらの諸点については指摘だけにとどめる。

参考文献

- 堀切 実 『松尾芭蕉集 ②』新編日本古典文学全集71 小学館
- 島居 清 『芭蕉連句叢書』桜楓社
- 乾 裕幸 「冬の日」は蕉風確立の書なのか 『国文学』平成三年11月号 學燈社
- 勝峯 晋風 「芭蕉の甲州吟行と高山麴時の研究」 『国語と国文学』昭和二十五年七月号
- 東 明雅 「芭蕉の連句」 『国文学 解釈と鑑賞』1993年5月号 至文堂
- 阿部 正美 『芭蕉連句抄 第三篇』明治書院
- 島居 清 『芭蕉連句全注解 第三冊』桜楓社
- 尾形 仂 他 『新編 芭蕉大成』三省堂

(博士後期課程一年)